

平成 27 年 7 月 12 日放送

富山教区 富山南組 常福寺 田村誠千代師

最近、ある企業のテレビコマーシャルで、このような内容を目にしました。ある人気女優の演じる女性。この女性は、就職の面接試験の会場に向かうためにバスに乗っていました。しかしこの人は大変に緊張しているようです。そんな時、バスの中で出会った、座る席がなくて困っておられたおばあさんに、自分の座っていた座席を譲ってあげました。すると、そのおばあさんは席を譲ってもらったお礼に、この女性の面接試験がうまくいくようにと、両手を合わせて「なんまんだぶ、なんまんだぶ」と、称えたのです。

しかしこの女性、「それでは逆に縁起が悪いです」と言い、それを聞いていたバスの車内ではいっせいに笑い声がおきます。そして、この女性は就職のための面接試験に向かいます。そこに現れた面接官は、なぜか、彼女に対して手を合わせてきます。実はこの面接官の人は、先ほどのバスに乗り合わせていた乗客の一人だったのです。そのことがわかり、この女性はそれまでの緊張がすっかりほぐれ、リラックスして面接に臨むことが出来た、というものです。

このコマーシャル、私はこの「縁起が悪い」と言われたことが気になっていたのですが、ご覧になっていた皆さんはどのように受け取られた方が多いのでしょうか。やはりこの女性のように、「縁起が悪い」などと思われたのでしょうか？

このコマーシャルの中では、バスの中の乗客は皆、彼女のこの発言を聞いてただ笑っておりました。そこには誰一人、「お嬢さん、なんまんだぶというのは、そのような縁起の悪い言葉などではないんですよ」と言った人はいませんでした。そのようにみんなが笑っていたということは、もしかして「なんまんだぶ」のお念仏は縁起が悪いものだ、というのは、一般的にそう思われている、共通した認識であるということなのではないでしょうか。

実際、ネット上などでの評判を見たときにも、どうやらそのように、縁起が悪い、気味が悪い、不愉快だ、などと思った人が少なくなかったようなのです。これは大変困ったことだと思いました。確かに、知らない人にいきなり「なんまんだぶ」と言われたら、びっくりするのでしょうか。

そして、みなさんは、お念仏を称える時とはどんな時でしょうか？

もし、生まれてから今まで、お葬式や、法事・法要だけでしかお念仏を称える、お念仏を聞かせていただく機会がないままに育ってきたのであれば、生きていく人に向かってお称えした時、それは人の死を連想させるもので、そこから、死人に向ける言葉だから「縁起が悪い」という思いが出てくるのも、無理はないことなのかもしれません。

よく、仏教というのは暗い、などという人がいます。これもやはり現代の日本仏教においては、お葬式や法事、お墓参りなど、亡くなった人にまつわる儀礼が目立つからなのでしょう。

また、そもそもお釈迦さまがご出家なされたきっかけ自体が、年をとること、病気になること、死ぬことという人間が避けられない、けれどできれば余り受け入れたくない、そんな姿に出遇われたことでした。また、仏教の考え方にある「諸行無常」という言葉の印象からもそう思われるのかもしれませんが。

でも、仏教というのはそこで終わりではないのです。私たちが主観として感じてしまっている「暗い」イメージが、阿弥陀さまの光にあって、「明るい」輝きに転じられていく、そういった道が示されているのが仏教であるということを知ることができればなりません。

無力でちいさな存在の私だからこそ、阿弥陀さまの「ご本願」と呼ばれる限りない願いがあるのです。無力でちいさな存在の私が、阿弥陀さまの大きな願いによって生かされて生きているのです。

そして、そんな阿弥陀さまの教えに会うことで、縁起がいいとか悪いとか私の都合で決めつけていた、ということに気付かされ、この私の生き方が転じられていくというのが、阿弥陀さまの教えなのです。

もちろん、小さい頃からの習慣というのは誰にでもありますし、私達にはこの世の人間が作った常識というものが染みついています。それが正しい事かどうかということは考える機会が少ないまま、そういうものであろうと思っただまま育ってきた、ということはいろいろとあろうかと思えます。

しかし、そういった習慣や常識の中には、よく考えてみたときに、ちょっと違うのではないかと感じる事もあるのではないのでしょうか。

もしいま、生きているこの私に阿弥陀さまのご縁がなければ、いつご縁を頂けるのでしょうか？亡くなってしまったら、もうお念仏を聞くことはできないのです。生きているうちにご縁を頂く事が大切なのです。

親鸞聖人は「ただよくつねに如来のみ名を称して、大悲弘誓の恩を報ずべしといえり」とおっしゃいました。「なんまんだぶ」のお念仏は報恩、感謝、お礼の言葉なのです。

私の曾祖父は、庭のサクラソウ、石や井戸水にまでもをお念仏をお称えしていたと聞いております。それは決して縁起の悪いものではなく、生きている私たちのためのものなのです。

自らの姿というものをかえりみて、自分一人だけのためではなく、隣の人、周りの人を思いやりながら感謝のうちにしっかり生きていきたいものであります。